

Journal of Occupational Science 第 23 卷, 第 2 号の書評

吉川ひろみ (県立広島大学)

2016 年の第 2 号は、「作業を経験すること (experiencing occupation)」についての特集で、12 編の論文が収録されており、質的研究が多いが、理論研究や評価法や検査機器を使う研究も含まれている。

グラウンデッドセオリーを使った研究が 3 件 (Kim, et al, 2016, Borges da Costa, et al, 2016, Bryson-Campbell, et al, 2016), 探索的記述的 (exploratory descriptive) アプローチ (Myers, et al, 2016), 解釈的現象学的 (interpretive phenomenological) アプローチ (Jennings & Cronin-Davis, 2016), ホリスティック内容分析 (holistic content analysis) (Hartman, et al, 2016) は、インタビューによりデータを収集した研究である。フォーカスグループから得られたデータによる解釈的探索的 (interpretive explorative) アプローチ (Kennedy & Lynch, 2016), 研究者自身を研究対象とした自己エスノグラフィ (Pollard & Carver, 2016), ブログ記事をデータとした談話分析 (discourse analysis) (VanderKaay, 2016) もある。他の 3 件の研究は、評価法や検査機器を用いた研究である。

Myers 他 (2016) は、カトリックの宗教団体である Religious Sisters of Mercy の修道女 15 名にインタビューを行い、Matuska と Christiansen's のライフバランスモデル (2008) の有用性を検討した。修道女たちはライフバランスモデルの 5 つの側面を反映する全般的なバランスについて述べていた。頻繁に登場した内容は、内省と祈り、受容、感謝、責任感、説明責任、コミュニティの支持的な構造だった。ライフバランスモデルは、修道女がバランスに達するための様々な機会を提供する多様な作業を行いながら、どのようにライフバランスに達するかを分析するのに有用であることが証明された。

Kennedy と Lynch (2016) は、アイルランドの青少年 16 名 (9~16 歳) を対象に、オンライン社会参加における作業の特性を探究した。年代毎の 3 つのフォーカスグループから得られたデータを分析した結果、4 テーマ a) 関係とつながりの構築, b) アイデンティティの実験と構築, c) サイバーカルチャーとバーチャルの基準, d) 過度の使用と非社会的行動, が明らかになった。この研究から、若者がオンラインでの社会的な作業経験から、どのようにオフラインの「現実」を展開していくかを考えることができる。

Pollard と Carver (2016) は、プラモデルなどの模型作りを趣味とする自身の経験を自己エスノグラフィとして研究した。模型作りは、複雑な人間特有の作業であり、製作者の安寧に貢献している。模型作りは児童期に始まり、模型作りに必要な技能は生涯に渡り発達する。模型作りのプロセスと最終的な作品が、製作者にとって重要である。この作業にはジェンダーの偏り、父子関係における役割が関連し、戦後イギリスのベビーブーマー文化、社会経済的かつ技術的環境との関連においても理解することができる。

Kim 他 (2016) は、ニュージーランドの韓国系移民 25 名にインタビューを行い、彼らが新しい環境において、「コントロールの再獲得：自分を価値づける旅」を行っていることを報告した。社会人として価値があると再び感じられる場所に到達するまで、韓国系移民が、「韓国方式」と「ニュージーランド方式」両方で作業を選択していた。Borges da Costa と Cox (2016) は、フォークダンスの伝統に由来するサークルダンスの教員やコーディネーター 22 名にインタビューを行った。「それなしでの生活を想像できない」という主要カテゴリーが生成された。Bryson-Campbell 他 (2016) は、作業的アイデンティティについて知るために、頭部外傷者 9 名にインタビューを行った。作業アイデンティティの変化に影響を与えたのは、作業選択、作業の再開、能力発達だった。変化の特徴は、限界の現実と挑戦への直面、否定

的レットルとの戦い、社会集団との隔絶だった。

VanderKaay (2016) は、食物アレルギーの子をもつ母親が書いたブログ記事 356 件を分析した。変化の管理者としての母親、アレルギーのママたち (allergymoms) としての母親、戦士としての母親、権利擁護者としての母親という 4 つの作業アイデンティティがあった。

Hartman 他 (2016) は、親が離婚や別居をした子ども 6 名 (10~20 歳) にインタビューを行った。親の離婚後に変化していく役割と責任に対して作業によって対処すること、利用できるサポートというテーマがあった。

Jennings と Cronin-Davis (2016) は、健康に良い作業に比べ、悪い作業についての研究が少ないことを指摘し、過飲について研究した。過飲である 22 歳男性へのインタビューから、Wilcock (1993) の人間の作業ニード理論を検証した。本研究は、作業、健康、健康感の関係はこれまでに報告された多くの作業科学研究よりも複雑であることを示した。

Cogan (2016) は、コミュニティ再統合 (Community reintegration) と移行 (transition) について文献的に概念を整理し、除隊後の軍隊から家庭への移行を、figured world (特定の人や活動によって描かれる世界) 間の移行として捉えた。本研究は理論分析である。

Ikiugu 他 (2016) は、意味ある作業と心理的報酬のある作業との違いを 2 つのパイロット研究によって調べた。最初の研究では、意味ある作業の選択を Assessment and Intervention Instrument for Instrumentalism in Occupational Therapy (AIIOT) で、日常作業の遂行と満足 of 捉え方をカナダ作業遂行測定 (COPM) で、脳活動を磁気共鳴機能画像法 (fMRI) で調べた。その結果、自己選択した意味のある作業は、脳の報酬神経路を作動させなかった。次の研究では、経験サンプリング法 (experience-sampling method, ESM) を使った。ESM はランダムに通知を受けた時間に、気分や作業と一緒にいる他者を記録する方法である。その結果、作業カテゴリーは、気分と有意義性に影響を及ぼした。特に楽しい作業が精神的な刺激となり、他者と共に行うときに最もポジティブな感情を引き出した。意味ある作業と心理的報酬のある作業は、精神的な刺激となって他者との関係を促進した。身体的刺激のある作業は意味があると認められ、心理的報酬がある作業は楽しみとして認められる傾向があった。

Atler 他 (2016) は、「PPR プロフィール (Pleasure, Productivity, and Restoration Profile)」という喜び、生産性、休息の評価法の妥当性を研究した。アメリカの大学生 226 名を対象として、重回帰分析を用いて検証した。日常の喜びと日常の生産性は、作業経験の包括的評価として統計的に優位な予測因子であり、生活の意味、肯定的影響、生活の満足感に影響を与えている。包括的な作業経験を統御する時、喜びは肯定的・否定的影響や生活の満足感を説明することを支えるのに対し、生産性は生活の意味や肯定的影響を説明することに貢献していた。日常的な休息の平均は、包括的作業経験やウェルビーイングに関わる変数において優位な予測因子ではなかった。

本号の掲載論文からも多様な質的研究法があることがわかる。グラウンデッドセオリーの他に、探索的、記述的、解釈的、現象学的といった形容詞がつく研究法がある。データは、インタビュー、フォーカスグループ、ブログ記事から得られている。研究者自身の経験を探求する自己エスノグラフィという研究方法も興味深い。作業の経験を探求するためには、こうした質的研究法が適していることがわかる。

理論を土台としてデータを整理することも試みられている。Matuska と Christiansen's のライフバランスモデルは、本誌にたびたび登場し、書籍も出版されている (Matuska & Christiansen, 2009)。COPM

など作業療法で使われている評価法を使用した研究もあり、作業を中心として議論を進めるという点で、作業科学と作業療法の重複がみられる。本誌第1巻1号に掲載されている本誌創設者である Wilcock による作業ニード理論が検証されている点も興味深い。作業科学の専門学術誌としての歴史が着々と積み上げられている感じがする。

研究対象者は、小学生から高齢の修道女まで、頭部外傷者、アレルギー疾患の子どもの母親、移民、親の離婚経験者など、極めて多様である。あらゆる立場にある人々を作業という視点から探求することができるかと再確認できる。

文献

- Kim, H., Hocking, C., McKenzie-Green, B., & Nayar, S. (2016). Occupational experiences of Korean immigrants settling in New Zealand. *Journal of Occupational Science*, 23(2), 181-195.
- Borges da Costa, A. L. & Cox, D. L. (2016). The experience of meaning in circle dance. *Journal of Occupational Science*, 23(2), 196-207.
- Bryson-Campbell, M., Shaw, L., O'Brien, J., & Holmes, J. (2016). Exploring the transformation in occupational identity: Perspectives from brain injury survivors. *Journal of Occupational Science*, 23(2), 208-216.
- Myers, J., Zak, J., Marquardt, T., Roche, M., Bender, M. & Fisher, G. (2016). Religious Sisters of Mercy and Matuska and Christiansen's life balance model. *Journal of Occupational Science*, 23(2), 145-155.
- Jennings, H. and Cronin-Davis, J. (2016). Investigating binge drinking using interpretative phenomenological analysis: Occupation for health or harm? *Journal of Occupational Science*, 23(2), 245-254.
- Hartman, L., Mandich, A., Magalhães, L. & Polgar, J. M. (2016). Young adults' experiences of parental divorce or separation during their adolescence: An occupational perspective. *Journal of Occupational Science*, 23(2), 234-244.
- Kennedy, J. & Lynch, H. (2016). A shift from offline to online: Adolescence, the internet and social participation. *Journal of Occupational Science*, 23(2), 156-167.
- Pollard, N. & Carver, N. (2016). Building model trains and planes: An autoethnographic investigation of a human occupation. *Journal of Occupational Science*, 23(2), 168-180.
- VanderKaay, S. (2016). Mothers of children with food allergy: A discourse analysis of occupational identities. *Journal of Occupational Science*, 23(2), 217-233.
- Matuska, K. M. & Christiansen, C. H. (2008). A proposed model of lifestyle balance. *Journal of Occupational Science*, 15(1), 9-19.
- Wilcock, A. A. (1993). Theory of the human need for occupation. *Journal of Occupational Science: Australia*, 1(1), 17-24.
- Cogan, A. M. (2016). Community reintegration: Transition between the figured worlds of military and family life, *Journal of Occupational Science*, 23(2), 255-265.
- Ikiugu, M. N., Hoyme, A. K. Mueller, B., & Reinke, R. R. (2016). Difference between meaningful and

psychologically rewarding occupations: Findings from two pilot studies. *Journal of Occupational Science*, 23(2), 266-27.

Atler, K. E., Eakman, A., & Orsi, B. (2016). Enhancing construct validity evidence of the Daily Experiences of Pleasure, Productivity and Restoration Profile. *Journal of Occupational Science*, 23(2), 278-290.

Matsuka, K. & Christiansen, C. H. (2009). *Life Balance: Multidisciplinary theories and research*. Thorofare, NJ, Slack and AOTA Press.